

Web 調査と質問紙調査の回答比較に関する研究

Differences in answer based on question presentation.

北 折 充 隆

Mitsutaka KITAORI

太 田 伸 幸

Nobuyuki OTA

問題と目的

1960年代にアメリカで生まれたインターネットは、1995年のWindows95の発売と共に爆発的な普及を遂げてきた。2008年にはインターネットの利用者数は8811万人、人口普及率は69.0%にまで到達した（総務省、2008）。当初学術ネットワークとしてスタートしたインターネットは、商用ネットワークとの相互接続を経て、現在では生活インフラとしての地位を確立している。

インターネットは電話やE-mailのような、1対1のコミュニケーションを行うツールとして機能するだけではない。ネットニュースやBBS、メーリングリストといった、地域や同時性を超越した趣味や嗜好を同じとする、集団でのコミュニケーションを可能とするシステムも構築されている（柴内、2001）。また、こうしたインターネットやコンピュータを媒介したコミュニケーションは、一般にCMC（Computer-Mediated Communication）と呼ばれるが、CMCにおける対人行動に関する社会心理学的アプローチが近年盛んになりつつある（e.g., 五十嵐、2002；木村・都築、1998；篠原・三浦、1999）。CMCはその大きな特徴として、非言語的な手がかりが少ない

ことが挙げられるが、自分が望んだ通りの自己提示が可能で（杉谷、2007；Walther、1996）、ネガティブなコミュニケーションとは捉えられていないことが、近年の研究で明らかになってきている。さらに、E-mailでのやりとりに関する花井・小口（2008）の研究が示すように、顔文字によるノンバーバル・コミュニケーションに似た感情提示が可能であり、一定の緊張緩和機能を有することも示されている。また小林・池田（2008）によれば、PCメールの利用は異質な他者とのコミュニケーションに対してポジティブな効果を持つことが明らかになっている。これらの結果を見る限り、インターネット上でのコミュニケーションは、実社会のコミュニケーションを超越し、より円滑で自己像に合致した自己提示を行っているといえよう。

しかし、長谷川・宮田・浦（2007）は、インターネット上の仮想空間では理想的な自己を形成し、それが現実社会の自己と乖離した理想自己を提示・振る舞う傾向について指摘している。その上で、インターネット上における自己評価のズレが、現実社会のそれよりも大きくなることを明らかにしている。また、衆人環視ともいえるような不特定多数の目に

つく公開の場であるブログにおいても、ブログ作者自身を主たる対象としてブログを書いており（三浦・松村・北山, 2008）、インターネットはコミュニケーション手段や社会空間と捉えても、現実社会とは異なるコミュニケーションや振る舞いをする場である可能性と考えられる。

ところで、現実社会とは異なる行動を取る要因として、その匿名性が挙げられる。掲示板やE-mailなど、素性を見せないままやりとりすることが可能であり、相互作用中の不安感を低減させる効果があったなどの報告もある（佐藤・吉田, 2008；西村, 2003）。こうした匿名性は、プライバシーを保護するといったメリットもあるが、一方で2ちゃんねるなど、匿名掲示板での悪質な虚偽情報が流布されたり、闇サイトで集まったメンバーによる殺人事件が発生したりといった重大事案も生じている。また、不特定多数を対象として、著作権を無視したWinnyなどを媒介したファイル交換と、ウイルスによる情報流出が大きな社会問題となっている（湯浅, 2006）。つまり、インターネット上で見知らぬ人とやりとりする場合、その情報が事実なのかを保証することはできず、FTF（Face to Face）の対面やりとりと比較して、その情報に対する信頼性は低いのが現状である。さらに、身元がはっきりしないことが、例えばネット上でアンケート調査などを実施した場合、回答者が他人を装って何度もアクセスし、回答することが可能となってしまう。こうした事情が背景にあり、「Web調査は偏りがあるので世論調査には利用できない」と考えられている。企業が商品のイメージや消費者の実態把握、マーケティング・リサーチなどにWeb調査を用い、ニーズの発掘に活用しているが、これまでWeb上での調査は、信頼性に疑問があるとされることも多かった。心理学においても、

Web調査は偏りがあって匿名性が高く、信頼できるデータとはいえないという漠然としたイメージが先行している。

しかし、Web上での調査は様々な年齢・性別の回答者を確保する上で非常に有効であり、調査対象者をこれまでにない範囲で拡大することが可能である。すなわち Web調査は、その対象がこれまでの多くの心理学研究で行われてきた大学生を対象とするのみでなく、広範な年齢・性別・職業を持つ被験者を対象とすることが可能であり、より現実の社会場面を投影した結果を得ることが期待できる。例えば2000年の米大統領選挙の予測調査において、ブッシュとゴア候補の接戦で報道が二転三転したが、Harris InteractiveのWeb調査だけが「得票率はタイであると」予測した（鈴木・星野, 2004；星野・繁樹, 2004；Taylor, 2000）。この予測では共変量をまとめる傾向スコアの効果に着目されたが、Webによる調査と質問紙を手渡しして実施した調査では、回答傾向にズレがあるかどうかは、特に心理学においてこれまであまり検討されてこなかった。上述の通り、心理学の研究は被験者に大学生を対象として質問紙を配布する形式が主流であるが、こうした配布形式の調査とWeb上でラジオボックスを選択する形式の調査で回答傾向に差が見られるのかは明らかでない。また、「大学生心理学」と揶揄される現状の心理学研究についても、大学生による回答が社会一般の実態を反映しているのかについてはほとんど議論されていないため、手法の問題点を洗い出すためにも、二つの調査手法で得られたデータを比較することは一定の意義があろう。

以上をふまえ、本研究では心理学尺度がWeb調査と質問紙調査で回答傾向に違いが生じるのかを検討し、それぞれの調査のメリット・デメリットについて整理する。心理学の

研究では、調査対象者に回答を求める項目について、大きく実態調査、態度や意見を問う項目、性格傾向等を明らかにするための心理尺度への回答に大別できる。そこで、これらの調査項目に関する比較を行うため、北折・小池（2008）および小池・北折（2008）の縦断調査で用いた項目について、Web調査で得られたデータと大学生を対象とした手渡し質問紙とで、比較検討を行う。北折らは、多くの人が日常的に行っている軽微な道路交通法違反について、ルールを破るプロセスや規範意識について検討してきた。この中でも2008年6月より、これまで規制の対象とならなかった後部座席のシートベルト着用が義務化されたことに着目し、縦断調査を実施している。北折らは運転席、助手席、後部座席でそれぞれシートベルトをどう評価しているのかについて、Web調査のデータのみを分析対象としていたが、本報告では同様のデータを大学生に対する手渡し質問紙としても実施し、二つのデータで違いがあるのかを探る。

以上の手順をふまえ、本研究は二つの群間に違いがあるのかを明らかにするような方向の研究ではない。調査方法による差が見られず、二つの調査データに顕著な差は見られないことが前提となる。しかし、大学生のみを対象としているか、様々な年齢・職業の人を対象とするといったサンプルの差違や、Webと手渡しの調査手法の違いでどういった結果の差違が生じるのかについて、多面的に比較・検討する。

【方法】

・**調査対象者** 本調査の対象者は当然ながら、Web調査と質問紙調査では大きく異なる。本調査は北折（2007）の研究の流れをくむ、シートベルト着用義務化に関する縦断調査の一環として実施された。Web調査データは230名

で、全員が普通自動車運転免許を取得・所持している。手渡し質問紙調査は国立M大学学生34名を対象としており、これらの対象者も前記と同様、運転免許を所持している。なお、本研究ではサンプル数の都合上性差について考慮せず、いずれの調査についても全て男性を対象とした。

・**調査時期** Web調査の調査対象者は2007年11月中旬から下旬にかけ、Web上での調査を依頼し、同意した対象が当該HPにアクセスする形で回答した。質問紙の配布については、2008年の1月下旬に授業時間中に配布した上で回答を求めた。

・**調査項目** 本研究では交通行動やシートベルトに対する着用意識を検証するのではなく、二つの調査手法でどういった違いが見られるかを明らかにすることである。まず心理学尺度については、斎藤（1999）に基づく社会考慮尺度（13項目）を実施した。社会考慮とは、“個人の生活空間を『社会』として意識している程度、または複数の個人からなる社会というものを考えようとする態度”と定義される。こうした社会のことを考える態度を持っていることは、自分のおこないが社会にどういう影響を及ぼすかに思い至り、自らの行動に一定の配慮ができる可能性が高い（元吉、2000）。さらに、あわせて小池・吉田（2005）の認知的共感性（6項目）および情動的共感性（7項目）と、新たに作成されたルールに対する考え方や意識に関する尺度（28項目）をあわせて投入した。

また規範意識に関する項目として、シートベルトの着用に対する交通意識に関する項目を設定した。質問は「ドライバーがシートベルトを着用しないで車を運転した」という交通違反状況を挙げ、それに対する態度12項目について、「1. まったく当てはまらない」～「7. 非常に当てはまる」の7件法で回答を

求めた。さらに交通違反状況の「ドライバー」の部分で、「助手席の人」および「後部座席の人」に変更し、同様に回答を求めた。これらは「警察に捕まらない、ばれにくい違反だと思う」、「運転席のシートベルトを着用すれば、事故に遭ったときのけがを大幅に軽減できると思う」、「私はいつもシートベルトを着用して運転する（だろう）」などの12項目で構成される。

【結果】

・ **ルールに対する意識尺度の因子分析** 考え方や意識に関する尺度（28項目）について、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行い、固有値の減少や因子の解釈可能性から3因子を抽出した。因子負荷量の採用基準は.45以上とし（固有値は6.35 → 2.69 → 1.43 → 1.19と減少した）、3因子で全分散の44.23%を説明できる。第一因子は「15. 一人では無力でも、みんなで力を合わせれば社会は良くなっていく」、「9. 他人の幸せを心がければ、巡り巡って自分が幸せになれると思う」、「24. ルール違反や犯罪行為は、皆で支え合っているという意識を高めることで減らせると思う」、等の7項目で構成されるため、「守り合い・支え合い（ $\alpha = .85$ ）」因子と命名した。第二因子は「18. どんなことであっても、ルールとして決まった以上は守らなければならない」、「14. 社会の秩序を保つためにも、ルールや法律は厳格に運用されるべきだ」、「2. 今まで人に非難されるようなルール違反や逸脱行動はしたことがないと断言できる」、等の7項目で構成されるため、「遵守傾向（ $\alpha = .76$ ）」と命名した。第三因子は「17. 「みんなのために」などという人も、結局は自分のことしか考えていないものだ」、「7. 社会全体のことよりも、自分のことを第一に考えることこそが重要である」、「3. 社

会の中に貧困などで苦しむ犠牲者がいてもそれは仕方がないことだ」、等の5項目で構成されるため、「自己利益の追求（ $\alpha = .69$ ）」と命名した（Table 1）。社会考慮（ $\alpha = .93$ ）はこれまでの研究結果を通じ、一貫して強い一因子性が確認されている（大山・宗方・北折, 2005）。本研究でも確認の意味で、主因子法バリマックス回転による因子分析を行った（Table 2）固有値は7.16 → 1.23と減少し、強い一因子性が伺えた（この一因子で全分散の55.06%が説明できる）。認知的共感性（ $\alpha = .64$ ）、および情動的共感性（ $\alpha = .71$ ）は既存の尺度構成に習い、 α 係数を算出して合成したにとどめた。いずれの尺度もおおむね信頼性の条件を満たしていると判断し、このまま分析に用いた。

・ **Web・手渡し調査間の比較** 二つの調査手法間の比較を行うが、手渡し調査とWeb調査では免許歴に差があるため、免許歴を共変数とした共分散分析を実施した。基本的に手法による違いをみるものなので、両者の間に差異が見られないことが予測されるが、社会考慮と認知的共感性、遵守傾向について共変数の影響が見られた「社会考慮（ $F(2, 260) = 4.14, p < .05$ ）」、および「認知的共感性（ $F(2, 260) = 4.67, p < .05$ ）」。これ以外の因子に有意差は見出されなかった（Table 3）。

次に、規範意識に関する12項目についても免許取得歴を考慮し、免許歴を調整変数とした共分散分析を行った。ここでも手法が異なるだけなので、2つの調査間で差異が見られないことが期待されるが、3項目において5%水準で有意差が認められた（Table 4）。有意差の認められた3項目のいずれも、手渡し調査の方が高い値を示していた。特に、ドライバーとして「私はいつもシートベルトを着用して運転する（だろう）」という項目では、大多数の調査対象者は法令を遵守する回

Table 1 ルールに対する意識尺度の因子分析結果

	I	II	III	共通性
< 守り合い・支え合い ($\alpha = .85$) >				
21. 思いやりのある人が増えれば、社会は良くなっていくと思う	<u>.85</u>	.22	-.36	.72
15. 一人では無力でも、みんなで力を合わせれば社会は良くなっていく	<u>.77</u>	.29	-.30	.61
6. みんながお互いに配慮をしあえば社会は良くなっていくと思う	<u>.70</u>	.18	-.27	.49
25. お互いに支え合う形で社会は成り立っていると思う	<u>.69</u>	.31	-.41	.50
9. 他人の幸せを心がければ、巡り巡って自分が幸せになれると思う	<u>.60</u>	.25	-.35	.37
28. 困っている人に手をさしのべるのは当然のことだと思う	<u>.53</u>	.06	-.31	.30
24. ルール違反や犯罪行為は、皆で支え合っているという意識を高めることで減らせると思う	<u>.50</u>	.24	-.28	.26
< 遵守傾向 ($\alpha = .76$) >				
26. 私はどんなときでもルールを厳密に守っている	.21	<u>.80</u>	-.24	.64
19. 社会のルールはいかなる場合でも守るべきだ	.25	<u>.64</u>	-.28	.42
18. どんなことであっても、ルールとして決まった以上は守らなければならない	.33	<u>.58</u>	-.33	.38
10. 実情に合わないルールや法律は守る必要はない	-.11	<u>.50</u>	.37	.32
14. 社会の秩序を保つためにも、ルールや法律は厳格に運用されるべきだ	.33	<u>.49</u>	-.10	.31
2. 今まで人に非難されるようなルール違反や逸脱行動はしたことがないと断言できる	-.04	<u>.47</u>	-.01	.26
4. 法律を守らない人に対する罰則はもっと重くするべきだ	.29	<u>.46</u>	-.17	.24
< 自己利益の追求 ($\alpha = .69$) >				
13. 他人のことよりも、まずは自分のことを守ることが重要だ	-.20	-.14	<u>.59</u>	.36
17. 「みんなのために」などという人も、結局は自分のことしか考えていないものだ	-.41	-.19	<u>.58</u>	.36
7. 社会全体のことよりも、自分のことを第一に考えることこそが重要である	-.42	-.11	<u>.56</u>	.36
11. 自分の利益を追い求めることは非難されるようなことではない	-.09	-.24	<u>.54</u>	.34
3. 社会の中に貧困などで苦しむ犠牲者がいてもそれは仕方がないことだ	-.28	-.12	<u>.50</u>	.26
< 残余項目 >				
20. 他人を出し抜いてでも、地位や名誉や財産を追い求めるのは当然の行為だ	-.40	-.18	.42	.23
1. みんながルールを破っているような状況でも、自分はルールを守り通すタイプだと思う	.20	.39	-.10	.17
23. 「悪法も法」であり、守らねばならない	.06	.34	-.06	.12
16. 人のために頑張っても、結局は自分が損をするだけだと思う	<u>-.52</u>	-.10	<u>.63</u>	.48
5. 自分が犠牲になっても人の命を助けるのはむしろ愚かな行為だと思う	<u>-.46</u>	-.09	<u>.56</u>	.38
27. 少しくらいならルールを破ってもどうということはない	-.20	<u>-.47</u>	<u>.53</u>	.40
自 乗 和	4.80	3.40	3.91	12.11
寄 与 率 (%)	25.39	10.75	8.09	44.23

Table 2 社会考慮尺度13項目の因子分析結果

項 目	I	共通性
13. 自分が暮らす社会全体のことについて考えることがある	<u>.83</u>	.69
9. 自分の生活と社会の仕組みがどのように関連しているのかを考えることがある	<u>.76</u>	.57
12. 自分の暮らす社会で今なかに問題になっているのか気になる	<u>.75</u>	.56
2. 社会全体がどのような方向に動いているかということに関心がある	<u>.75</u>	.56
10. 社会の中で、自分がどのような立場におかれているのかを考えることがある	<u>.75</u>	.56
11. 自分の行動が、同じ社会に暮らす他の人々にどのように受けとめられるかを考えることがある	<u>.74</u>	.55
1. 社会がいかに成り立っているかということについて考えることがある	<u>.72</u>	.52
3. 社会の中で、自分とは異なる立場にいる人々のことについて考えること	<u>.71</u>	.52
5. 社会の中で、自分はどのように行動すべきなのかを考えることがある	<u>.70</u>	.50
7. 社会の変化が、自分の生活にどのような影響を与えるのかを考えることがある	<u>.69</u>	.47
4. 自分の行動がいかに社会に影響を与えているのかを考えることがある	<u>.65</u>	.43
8. 自分の行動が、同じ社会に暮らす他の人々にいかなる影響を及ぼすかを考えることがある	<u>.65</u>	.42
6. 自分の暮らす社会が将来どのようなようになっていくのか気になる	<u>.59</u>	.34
自 乗 和	6.68	
寄 与 率 (%)	55.06	

Table 3 調査手法別に見た各項目の平均値と標準偏差

項 目	手渡し	Web 調査	F 値
社会考慮	3.49 (.84)	3.38 (.67)	4.14 *
認知的共感性	3.30 (.60)	3.37 (.51)	4.67 *
情動的共感性	3.02 (.52)	3.16 (.41)	.09
守り合い・支え合い	3.68 (.67)	3.72 (.64)	.67
遵守傾向	2.88 (.61)	3.15 (.44)	.58
自己利益の追求	3.07 (.66)	2.94 (.59)	.06

() 内は標準偏差

* $p < .05$

Table 4 シートベルトの着用に対する交通意識に関する項目の平均と標準偏差

	ドライバー		助手席		後部座席	
	手渡し	Web 調査	手渡し	Web 調査	手渡し	Web 調査
・違反と判って意図的にやる人が多い	4.50(1.42)	4.97(1.73)	3.67(1.47)	4.10(1.66)	2.78(1.91)	3.30(1.74)
・悪質な違反行為である	4.35(1.86)	4.47(1.68)	3.88(1.39)	3.94(1.63)	2.44(1.37)	3.04(1.49)
・違反行為で得られるメリットも大きい	2.56(1.76)	2.64(1.67)	2.58(1.50)	2.71(1.51)	3.59(1.93)	3.34(1.50)
・つい、無意識にやってしまう違反だと思う	4.79(1.65)	4.00(1.90)	5.30(1.42)	4.60(1.68)	5.44(1.92)	4.96(1.88)
・非常に危険な違反行為だと思う	5.38(1.39)	4.55(1.77)	<u>5.52(1.25)</u>	<u>4.53(1.73)</u>	4.03(1.60)	3.72(1.63)
・重い刑罰が科される違反だと思う	3.41(1.56)	3.37(1.68)	3.24(1.50)	3.32(1.53)	2.31(1.28)	2.97(1.57)
・多くの人がやってしまうような違反行為だ	4.68(1.45)	4.35(1.74)	5.27(1.48)	4.53(1.69)	5.87(1.65)	5.31(1.78)
・警察に捕まらない、ばれにくい違反だと思う	4.12(1.82)	3.93(1.72)	4.21(1.71)	4.03(1.63)	5.56(1.63)	4.77(1.75)
・周りの人には白い目で見られると思う	3.79(1.70)	3.92(1.46)	3.70(1.70)	3.63(1.50)	2.16(1.30)	2.81(1.52)
・別にこの違反をやっても構わないと思う	2.79(1.30)	2.81(1.63)	2.58(1.52)	2.88(1.55)	4.34(1.68)	3.71(1.57)
・運転席のシートベルトを着用すれば、事故に遭ったときのけがを大幅に軽減できと思う	5.94(1.63)	5.70(1.67)	6.12(1.32)	5.80(1.54)	<u>5.78(1.29)</u>	<u>5.13(1.56)</u>
・私はいつもシートベルトを着用して運転する(だろう)	<u>6.74(0.57)</u>	<u>6.17(1.52)</u>	6.22(1.36)	5.97(1.65)	2.53(1.92)	3.24(1.85)

※ 下線を付した項目が5%水準で有意差が認められた項目である

答を行っていた。どちらの調査結果も天井効果を示していたにも関わらず、Web調査では法令を遵守しない回答も含まれていたために有意差が認められた。実際、手渡し調査の対象者は中間評定である4よりも大きい回答(5~7)しか認められなかったのに対し、Web調査では4以下の回答を示す調査対象者が26名(12.6%)存在していた。

【考察】

本研究では、手渡しによる質問紙調査とWeb調査のデータ比較を行った。本研究で得られた結果を見る限り、二つの調査間であま

り差は見られず、Web調査は心理学的研究に有効であると考えられる。ただ、社会考慮と認知的共感性に有意差が見られ、社会考慮は手渡しの方が、認知的共感性はWeb調査の方が高かった。これらは免許歴を共変数としてもその影響を受けにくい変数であり、今後調査を実施する場合は留意する余地があろう。宗方・北折・大山(2006)によれば、社会考慮は社会の因果関係やつながりへ思いを至らせる程度を測定する尺度であるとされているが、このことは一貫した測度であることを意味しない。すなわち宗方らの大学生活4年間を追った縦断調査によれば、入学時より社会

考慮得点は学年進行と共に上昇し、就職活動がピークとなる3年後期に最も高い値を示した後、4年次卒業までの一年は低下傾向を示した。このことは、就職活動を行う準備段階では経済状況や社会の動静を把握し、企業研究などの進路選択に直面するため、社会のことを考えざるを得ない。こうした背景が、社会考慮得点を上昇させていたと考えられる。4年次に進級し、卒業論文への取り組みが学生生活の中心となっていたことと、就職先が内定して就職活動を終える学生が増加することが、社会考慮得点を低下させた原因と考えられる。今回手渡し調査に用いた学生も、こうした要因が影響している可能性は否定できない。認知的共感性については、今回手渡し調査の対象とした学生はほぼ全員が理系であり、論理的な思考能力が高い被験者を対象にした分、共感性得点が低くなったとも解釈できる。いずれにせよ、こうした理由を鑑みれば今回のデータで偏りが生じているのはむしろ手渡しデータの方であり、Web調査の方が実態をより反映していたとも解釈できる。規範意識に関する12項目について、「シートベルトの非着用は非常に危険な違反行為だと思う（助手席）」、「運転席のシートベルトを着用すれば、事故に遭ったときのけがを大幅に軽減できると思う（後部座席）」、「私はいつもシートベルトを着用して運転するだろう（ドライバー）」の3項目に有意差が見られ、いずれの項目も手渡し群の方がWeb調査回答群よりも高い値を示していた。「私はいつもシートベルトを着用して運転するだろう（ドライバー）」については、大多数の調査対象者は法令を遵守する回答を行っており、どちらの調査結果も天井効果を示していたといえる。それに関わらず、Web調査では法令を遵守しない回答も含まれていたため有意差が認められた。手渡し調査の対象者は、中間評

定である4よりも大きい回答（5～7）しかしていなかったのに対し、Web調査では4以下の回答を示す調査対象者が26名（12.6%）存在していた。これは、手渡し調査において調査実施者は授業担当者であり、調査実施時に同席していることにより回答がより望ましい方向に誘導される実験者効果が生じたためではないかと考えられる。したがって、Web調査はこうした実験者効果が予測されるような調査を実施する際には、むしろ極めて有効な手段と考えられる。

統計的な分析結果ではないが、全体として本研究の結果をみると、Web調査の方が社会的望ましさを反映させた回答だったといえる。ただこの結果は、上述のようにWebデータに歪みが生じていることを意味しない。ほとんどの項目は両調査法間で有意差を検出しておらず、どちらの手法を用いても概ね実態を反映したデータであるといえよう。また有意差が生じた数項目についても、有意差が生じたそれなりの解釈が可能であり、こうした傾向を理解した上で利用すれば、Web調査は広範な調査対象者を対象とした調査が可能で有用な尺度であると結論できる。本研究で得られた知見は、大学生にサンプルが偏りがちなこれまでの研究に新たな可能性を示すものである。今後はさらに多くの尺度について検討し、どういった調査に有効なのかをさらに検討する必要がある。

最後に、本研究で明らかにならなかった課題もある。本研究では社会的望ましさなどを強く反映すると予測される項目で比較を行ったが、Web調査が的確に実態を反映する調査項目とそうでない項目が存在すると考えられる。今後はどのような項目がWeb調査に有効なのか、さらに広範な項目を使用して明らかにする必要がある。また、本調査では全ての被験者が男性であり、性差は考慮されて

こなかった。今後は女性データも用いた検討が必要と考えられる。

引用文献

- 花井友美・小口孝司 (2008). Eメールの交換課程における感情表出の出現パターン：テキスト・マイニングを用いた分析 社会心理学研究, **24**, 131-139.
- 長谷川孝治・宮田加久子・浦光博 (2007). インターネット上の自己評価と現実の自己評価との相互影響課程についての検討：両者のズレと精神的健康との関連の観点から 社会心理学研究, **23**, 45-56.
- 星野崇宏・繁榊算男 (2004). 傾向スコア解析法による因果効果の推定と調査データの調整について 行動計量学 **60**, 43-61.
- 五十嵐祐 (2002). CMCの社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性 社会心理学研究, **17**, 97-108.
- 木村泰之・都築誉史 (1998). 集団意志決定とコミュニケーション・モード 実験社会心理学研究, **38**, 183-192.
- 北折充隆 (2007). 一時不停止に関する観察的研究 金城学院大学論集(人文科学編) **4**, 1-8.
- 北折充隆・小池はるか (2008). ルール形成プロセスに関する縦断的検討 (1) -後部座席シートベルト着用義務化について- 日本社会心理学会第49回 大会発表論文集 Pp.342-343.
- 小林哲郎・池田謙一 (2008). PCによるメール利用が社会的寛容性に及ぼす効果：異質な他者とのコミュニケーションの媒介効果に注目して 社会心理学研究, **24**, 120-130.
- 小池はるか・北折充隆 (2008). ルール形成プロセスに関する縦断的検討 (2) -社会考慮との関連について- 日本社会心理学会第49回大会発表論文集 Pp.344-345.
- 小池はるか・吉田俊和 (2005). 対人的迷惑行為実行頻度と共感性との関連-受け手との関係性についての検討-, 東海心理学研究, **1**, 3-12.
- 三浦麻子・松村真宏・北山聡 (2008). ブログにおける作者の志向性と内容・コミュニケーションとの関連 心理学研究, **79**, 446-452.
- 元吉忠寛 (2002). 社会考慮が西暦2000年問題の認知・対策行動に及ぼした影響 社会心理学研究 **18**, 1-10.
- 宗方比佐子・北折充隆・大山小夜 (2006). 4年間の大学生活は、学生の意識と行動に何をもたらすのか3 -縦断調査による新設学部学生の4年間変遷に関する総合研究- 金城学院大学人文・社会科学研究所紀要 **10**, 13-37.
- 西村洋一 (2003). 多人不安、インターネット利用、およびインターネットにおける人間関係 社会心理学研究, **19**, 124-134.
- 大山小夜・宗方比佐子・北折充隆 (2005). 4年間の大学生活は、学生の意識と行動に何をもたらすのか2 -縦断調査による職業意識および対人関係の変遷過程の検討- 金城学院大学人文・社会科学研究所紀要 **9**, 1-21.
- 斎藤和志 (1999). 社会的迷惑と社会を考慮すること 愛知淑徳大学文学部論集 **24**, 67-77.
- 佐藤広英・吉田富士雄 (2008). インターネット上における自己開示 -自己-他者の匿名性の観点からの検討- 心理学研究, **78**, 559-566.
- 柴内康文 (2001). インターネットの作る情報環境 川上義郎(編) 情報行動の社会心理学 北大路書房 pp.54-63.
- 篠原一光・三浦麻子 (1999). WWW掲示板を用いた電子コミュニティ形成過程に関する研究 社会心理学研究, **14**, 144-154.
- 総務省 (2008). 情報通信白書平成20年版 PDF版 2008年7月8日 <<http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h20/pdf/k1030000.pdf>> (2009年1月8日)
- 杉谷陽子 (2007). メールはなぜ「話しやすい」のか? : CMC (Computer-Mediated Communication) における自己提示効力感の上昇 社会心理学研究, **22**, 234-244.
- 鈴木督久・星野崇宏 (2007). 傾向スコアを巡る対話 2007年11月29日 <http://www.nikkei-r.co.jp/topics/lectures/pdf/stok2004_keiko.pdf> (2009年1月19日)
- Taylor, H (2000). Does internet research work? *International Journal of Market Research*. **42**, 51-63.
- 湯浅顕人 (2006). ウィニー情報流出との戦い 宝島社 新書
- Walther, J.B. (1996). Computer-mediated communication: Impersonal, interpersonal, and hyperpersonal interaction. *Communication Research*, **23**, 1-43.